「食」をとおした地域づくり～ドイツ「Tafel」～

周南市立夜市小学校　教諭　藤本　浩行
（令和３年度派遣　ドイツ　デュッセルドルフ日本人学校）

１．「Tafel」とは

令和４年３月、デュッセルドルフ日本語教会で知り合ったＫさんが、私が日本で「子ども食堂」に関心をもって活動していることを知り、ドイツにも食料の提供、食品ロスの取組があることを教えてくださいました。

ドイツのフードバンク「Tafel」とは、賞味期限の問題、包装の破損や在庫が多過ぎるなどの理由で流通できなくなった食品などの寄付を企業から受けて、生活困窮者などに配給する活動や団体のことを言うそうです。

Ｋさんの知り合いが、実際にデュッセルドルフにある「Tafel」でボランティア活動をされている方を紹介してくださったことが活動の契機となりました。場所は、デュッセルドルフ日本人学校から電車と徒歩で約３０分のキリスト教教会の付属施設でした。Ｋさんを通して、責任者の Barbara 様にボランティア活動をお願いしたところ、快諾してくださいました。

タイムリーにも、春季休業であったので、私もここの「Tafel」でボランティア活動をさせていただくことになりました。大まかに言えば、月曜日の 11 時～20 時、火曜日の９時から 12 時までに開かれています。

私は、このボランティア活動を帰国まで可能な範囲で行いました。月曜日の午後からは、代休日や長期休みに行いました。平日なので夕方からは、勤務が終了してから通いました。

大まかに言えば２つ仕事があります。１つ目は食品を積んだトラックから降ろし、とりあえずコンテナに入れて種類ごとに大まかに分ける力仕事です。２つ目は、食品の傷みのあるものを除去して、野菜や果物をコンテナに丁寧に並べる作業と、食品を手渡す窓口の仕事です。

家族の人数を聞き、野菜や果物を提供する仕事をしている場面

２．ボランティア活動の流れ

まず、事務所で挨拶をして受付をします。その日の持ち場が告げられますが、明確に決められているのではなく、その日の状況に応じて他のボランティアの方と一緒に仕事をすることになります。本校のドイツ語の先生に協力を得て作成した自己紹介のカードを見ながらたどたどしいドイツ語で挨拶をしました。私が日本人だと知ると、「この野菜は、日本語では何と言うのか？」などという質問もよくされました。

仕分けをする食料品には、種類別のプレートの絵とドイツ語・英語での表記があるので、助かります。ドイツ語の発音を聞き取ることが一苦労です。中には、自分が欲しいものを要求する方や渡した食品が不要な場合は、戻す方もいます。身振り手振りで、仲間のボランティアの方に手を借りながら、楽しく活動することができました。このような活動をしながら、生活に必要なドイツ語を学んでいきました。

３．食品を渡すまでの一連の流れ

ボランティアの人数は、７～８人ぐらいで、10 人を超えることはありませんでした。暗黙に、それぞれの持ち場が決まっていて、仲良くボランティア活動をすることができました。

① 窓口の担当

「Tafel」利用のカードを見せてもらい、「何人家族であるかを聞く」

↓

② 「食料品渡し」

後ろで待機しているボランティアが、「野菜類」「パン類」「肉魚類」（冷蔵庫に入っている）をカゴに入れて渡す。

↓

③ カゴを受け取る

利用者は、各自が持って来た袋やカートに渡された食品類を入れる。空になったカゴを受け取る。

月曜日 12：00 頃～15：00 頃まで食品類を積んだトラックから、積み荷を降ろして、種類ごとに分類する仕事が重労働です。３台ぐらいの車が食品を運んできます。次の車が到着す
る合間に、食品の大まかな分類を行います。

袋に入った野菜類の一部が腐っていたり傷んでいたりするものもあります。夏場、野菜が腐って、ドロドロになって悪臭を放っているものもありした。「食品ロス」を減らすことが目的の一つでもありますが、食品を提供する側の店のモラルを疑いたくなるものもありました。店が、食品を廃棄する手間を「Tafel」を利用して省いていると疑われるようなことになってほしくないものです。逆に、このままでも店頭で販売できそうなものも多数ありました。

私は、このボランティア活動を通して、ドイツ社会の食品ロスの現実を垣間見たような気持ちになりました。

４．責任者の方へのインタビュー

私は、ボランティア活動を通して、ある程度の人間関係ができてから代表の方にインタビューをお願いしたので、素朴な質問にも快く答えてくださいました。なお、インタビューに際しては、本校のドイツ語科のＳ先生が通訳として同席してくださったので、大変助かりました。

Ｑ１「ここの『Tafel』の運営母体は、どこですか」

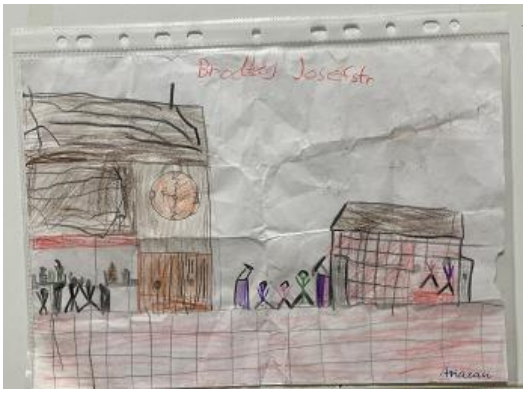
Ａ１「隣のキリスト教の教会付属施設を借用しています」

Ｑ２「ここの『Tafel』は、いつ頃から始まりましたか」

Ａ２「1990 年代に、イタリアからの移民が多くなったときから始まりました」

Ｑ３「Barbara 様は、どういうきっかけでこのボランティア活動を始められましたか」

Ａ３「自分が年金生活者になるとき、お世話になった地域に恩返しができるか考えていたときに、この『Tafel』の仕事を知りました。約２年前です」



休憩室に飾ってあったお礼の絵

Ｑ４「このボランティア活動をされていて、うれしかったことはありますか」

Ａ４「支援者の方から、お礼を言われるときです。子どもから絵をもらったときです」

Ｑ５「反対に困ったことは、ありませんか」

Ａ５「必要としている食品を渡したとき、他の人と比べて、『どうして、私には卵をくれないの？』と苦情を言われたことです。なかなか、みなさん方の要求に平等にこたえることができないときに、悩みました」

Ｑ６「行政からの補助金は受けていますか」

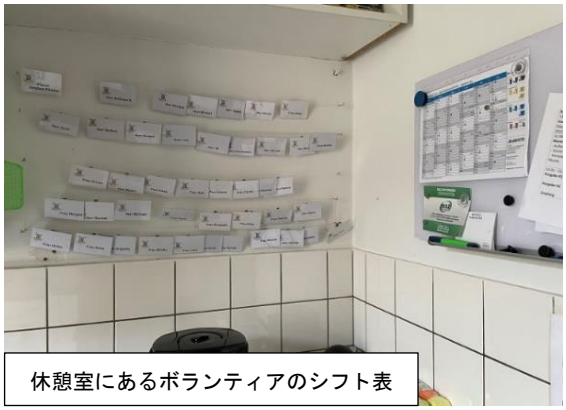
Ａ６「まったくのボランティアです。ただし、2023 年エネルギー価格、物価高騰を受けて、一時的にデュッセルドルフの各『Tafel』に 7,000€の補助金を行政から支援されました。そのお金で、冷蔵庫を購入しました」

ここの「Tafel」では、約 120 家庭に食品を配布しているそうです。ボランティア登録している方が 30～40 人だということです。

私はイランからの移民で、ここでボランティア活動をしている方と知り合いになりま

した。彼にインタビューすると、「互いに助け合う気持ちでやっている」と、ごく自然に言われました。そして、仕事が終わると、当然のように労働の対価として自分が必要としている食品類を袋に入れて持って帰っていました。その光景に驚きを感じましたが、システムとして「Tafel」が機能していくためには、責任者の方も黙認されていました。

冷蔵庫も食品衛生に配慮している


休憩室にあるボランティアのシフト表

花類も手渡されている

野菜くずもリサイクルされている

環境に配慮しているドイツだけあって、「紙、段ボール」「野菜や果物のくず」がリサイクルされていました。

また、「Tafel」には、花類も集まっていました。「花より団子」ではなく、利用者に花類を渡すことに心の豊かさが伝わり、感激しました。

コロナ禍、エネルギーの高騰などで離職をよぎなくされ、「Tafel」の利用者が増えているそうです。

段ボールもリサイクルされている

５．デュッセルドルフ市内の他の「Tafel」

私が、日本で「子ども食堂」に携わっていることを話すと、Barbara 様は大変興味をもってくださり、逆にいろいろなことを私に質問されました。Barbara 様に、デュッセルドルフ市内にもすぐに食べることができる「Tafel」はあるのか質問してみました。

基本的には、デュッセルドルフ市では、食料品の配布に必要なものは、市役所に行って証明をいただき、指定された所に行って支援を受けるそうです。調べてみると、デュッセ

ルドルフ市内だけでも、10 か所以上の「Tafel」がありました。私が、ボランティア活動をしたところは、食料の材料だけを提供していましたが、他の「Tafel」では、調理された食べ物を提供しているところもありました。

以下の写真は、デュッセルドルフ市街地の中心部にある「Tafel」で、毎週土曜日に誰でも、利用することができます。テイクアウトですが、昼時には長蛇の列ができているときがありました。

私も、２度利用させてもらいましたが、募金箱のようなものに、お金を入れると食べ物を受け取ることができます。豆類や温かい野菜を煮込んだスープで、パンや水も、お菓子もいただきました。50 セントと書いてありましたが、金額は利用者の善意で、入れなくてもよいようです。

すぐに食べることができる食料提供

他にも、キッチンカーのような「Tafel」をみつけました。必要な方が、自然に利用していました。

それぞれのニーズにあうように、支援活動を展開していることがわかりました。

実際に、運営母体は、キリスト教関係の運営の母体が多いようです。私がボランティアをした地区は、約 150 年前から鉄鋼関係の労働者が集う生活困窮者が多いところであると聞きました。当時から、生活困窮者を支援する動きがあったという長い歴史があることを知りました。日本と歴史的文化的に異なるので、単純に比較することはできませんが、「Tafel」が地域づくりに寄与していることがわかりました。

私が「Tafel」で、ボランティア活動をしていることを知ったデュッセルドルフ日本人学校の同僚も参加するようになったことはうれしいことでした。また、通訳をお願いした現地採用のドイツ語科の S 先生も、「今まで『Tafel』という言葉は聞いたことがあっても、実際にどのように運営されているのか知らなかったので、今後はドイツ文化理解の授業の中でも、取り扱うことができるように調べていきたいと思います」と言われ、うれしく思いました。そして、私に「Tafel」に関するいろいろな資料をくださり、日本語訳までも付記していただき、有難く思いました。

帰国するまで行った「Tafel」でのボランティア活動を通して、様々な人と出会い、現地理解の一助になり感謝しています。帰国したら、「みんなの食堂」を運営し、食を通じて、人と人をつなぐボランティア活動をしてみようという決意に至ったことを思い出しました。